

2016 · 第8辑

日语教育与 日本学

Japanese Language Education and Japanese Studies

■ 日语教育研究 ■ 日汉语言对比研究 ■ 日本文学研究 ■ 博导风采

主 编◎刘晓芳 徐 曙 曹大峰
执行主编◎曹大峰



华东理工大学出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

2016 · 第8辑

日语教育与 日本学

Japanese Language Education and Japanese Studies



华东理工大学出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

· 上海 ·

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学(第8辑) / 刘晓芳,徐曙,曹大峰主编. —上海:
华东理工大学出版社,2016.10

ISBN 978-7-5628-4766-3

I. ①日… II. ①刘…②徐…③曹… III. ①日语-语言教学-文集
②日本-研究-文集 IV. ①H36-53②K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2016)第 192006 号

特邀编辑 / 李 波

责任编辑 / 王一佼 叶聪颖

装帧设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地址:上海市梅陇路 130 号,200237

电话:021-64250306

网址:www.ecustpress.cn

邮箱:zongbianban@ecustpress.cn

印 刷 / 常熟市华顺印刷有限公司

开 本 / 787mm×1092mm 1/16

印 张 / 10.5

字 数 / 252 千字

版 次 / 2016 年 10 月第 1 版

印 次 / 2016 年 10 月第 1 次

定 价 / 58.00 元

版权所有 侵权必究

日语教育与日本学

2016·第8辑(日语教育专辑)

中国日语教学研究会 上海分会
日语教育分会 主办
民族院校分会

编委会主任:徐一平

主 编:刘晓芳 徐 曙 曹大峰

执 行 主 编:曹大峰

编 辑 部:梁 艳 王一佼 叶聪颖

编委会顾问(按姓氏汉语拼音为序)

陈俊森(华中科技大学)	冈崎眸(茶之水女子大学)
刘金才(北京大学)	皮细庚(上海外国语大学)
宿久高(吉林大学)	谭晶华(上海外国语大学)
文秋芳(北京外国语大学)	吴寄南(上海国际问题研究所)
修 刚(天津外国语大学)	张 辉(华东理工大学出版社)

编委会成员(按姓氏汉语拼音为序)

庵功雄(一桥大学)	蔡凤林(中央民族大学)
曹大峰(北京日本学研究中心)	杜 勤(上海理工大学)
高 宁(华东师范大学)	侯仁锋(县立广岛大学)
胡令远(复旦大学)	冷丽敏(北京师范大学)
李晓博(深圳大学)	林 洪(北京师范大学)
刘晓芳(同济大学)	刘雨珍(南开大学)
毛文伟(上海外国语大学)	潘 钧(北京大学)
潘世圣(华东师范大学)	钱晓波(东华大学)
邱根成(上海对外经贸大学)	杉村泰(名古屋大学)
盛文忠(上海外国语大学)	田野村忠温(大阪大学)
王宝平(浙江工商大学)	王铁桥(河南大学)
王婉莹(清华大学)	王 勇(浙江工商大学)
望月圭子(东京外国语大学)	吴 川(日本大学)
毋育新(西安外国语大学)	徐静波(复旦大学)
徐敏民(华东师范大学)	徐 曙(上海对外经贸大学)
徐一平(北京日本学研究中心)	许慈惠(上海外国语大学)
尹 松(华东师范大学)	张文丽(西安交通大学)
赵 刚(西安交通大学)	赵华敏(北京大学)
周异夫(吉林大学)	朱桂荣(北京日本学研究中心)

卷首语

本刊自 2011 年 5 月创刊至今已出 7 辑,7 辑文集彰显了日语学界资深学者厚积薄发的结晶,展示了年青新锐思想火花的碰撞。为了更好更快地将本刊做大做强,更及时更全面地反映日语学界的最新成果,从第 5 辑起,本刊改为每年出版两辑,并由中国日语教学研究会上海分会邀请日语教育分会和民族院校分会共同主办,这一办刊决策也得到了华东理工大学出版社的鼎力支持。今后我们仍将继续探索与国内外学术机构合作的多种模式。

为了联袂全国日语教育及日本学研究方面的专家学者办好集刊,积极争取外语教育学和外国学领域同行专家的指导和支持,编委会特邀中日两国 10 位资深学者担任学术顾问,聘请 38 位日语教育学、日本语学、日本文学及翻译、日本文化方面的专家学者担任编委会成员,并且设立了独立的学刊编辑部,导入了特别约稿和匿名审稿的制度,夯实了办好集刊的组织基础。

第 8 辑作为本刊首期“日语教育”专辑,由中国日语教学研究会日语教育分会承担了组稿工作。为了开阔学术视野,促进国内外最新信息和研究成果的交流,我们在中国日语教学研究会主办的三届全国高校日语教师专业发展论坛和骨干教师研修会的基础上,利用各种学术途径,特约美国、日本和国内专家的专稿 10 篇,并且从一般征稿中精选上乘之作 6 篇,经过精心编辑集成,奉献给关心和从事日语教育及日本学研究的同仁和读者。

今后我们希望继续推出日语教育及日本学其他领域的专辑,不断提高刊用文章的质量和关注度,为扩大我国日语教育界的学术实力和影响而努力。

谨对百忙中倾心赐稿的专家学者和辛勤审稿的专家编委表示衷心感谢!
期待学界同仁的继续扶持和鼎力相助!

《日语教育与日本学》编委会

2016 年 5 月

目 录

•日语教育研究•

- ソーシャルネットワーキングアプローチのすすめ 當作靖彦(1)
- 外语教学语法建构的实践与课题
- 兼论许国璋语法教学思想的精髓与继承 曹大峰 刘 贤(11)
- 『JF 日本語教育スタンダード』から見る学習目標と教室活動 丸山千歌(23)
- 从教学走向学习引导
- 从《基础日语综合教程①》的编写看课堂教学 林 洪(31)
- 日本語教育でなぜ「評価」がもっと注目されるべきか 近藤ブラウン妃美(58)
- 文法項目の導入で考慮すべきこと
- 「と思う」とその関連表現を例に— 庵功雄(66)
- 日语偏误研究的课题与研究方法 于 康(76)
- 高等教育における日本語教育の現場報告
- 日本語教育の現状と課題を考える— 冷丽敏 小出慶一(88)
- 我国日语教育跨文化交际研究的回顾与展望 朱桂荣(96)
- 成人学習論に基づくラウンドテーブル型日本語教師研修の可能性
- 運営側の学びの考察— 池田広子(106)
- 基于科研视点的大学日语青年教师专业发展个案研究 尹 松(114)
- 互动合作中学习者关系的构筑 赵冬茜(122)

•日汉语言对比研究•

- 关于多人会话中视点的汉日对比研究 田黎 贾琦 张琪琬(135)

·日本文学研究·

芥川龙之介的“蝴蝶梦”

——从多边文化视角考察芥川龙之介的中国之行 周 阅(145)

生存困境中的选择与抗争

——浅析宫本辉《春梦》中的隐喻 葛 强(151)

·博导风采·

曹大峰教授 (157)

周阅教授 (158)

版权声明: 作者投稿或接受集刊编委会约稿,即视为遵守集刊主办方与本社关于集刊出版合同之约定,同意授予本社该作品的专有许可使用权,包括但不限于该作品的专有出版权、复制权、发行权以及电子与网络传播权。

Table of Contents

• The Study of Japanese Education •

Introduction to Social Networking Approach to Teaching Foreign Languages	Y.-H. Tohsaku (1)
The practice and subjects on the construction of foreign language pedagogical grammar —The essence and inheritance of Xu Guo-zhang’s thoughts on pedagogical grammar	CAO Dafeng ,LIU Xian (11)
Objectives and Class Activities Using “The JF Standards for Japanese-Language Education”	Chika Maruyama (23)
From Instructing to Guiding —Classroom Teaching from the Perspective of <i>A Comprehensive Course in Fundamental Japanese</i>	LIN Hong (31)
Why should we give more attention to “assessment” in Japanese language education?	Kimi Kondo-Brown (58)
What should be considered in the instruction of grammatical forms;In the case of <i>to omou</i> and its related expressions	Isao Iori (66)
Issues on Japanese error analysis and the research methods	YU Kang (76)
A Practice Report of Japanese Language Education in Higher Education —Reflections on the Status and Problems of Japanese Language Education	LENG LiMin, KoIdeKiIch (88)
Retrospect and Prospect of Japanese Intercultural Communication Studies in China	ZHU Guirong (96)
Possibility of Round-table type Japanese language Teacher Training Based on Adult Learning Theory;Consideration of Operators	Hiroko Ikeda (106)
Case study of young Japanese language teachers’ professional development from the prospective of academic research	YIN Song (114)

The Relationship built in JFL Learners' Interaction	ZHAO Dongqian (122)
---	---------------------

• The Contrastive Study of Japanese and Chinese languages •

Contrastive Study on Perspective in Chinese and Japanese Multi-participant Discussions	TIAN Li, JIA Qi, ZHANG Qi long (135)
---	--------------------------------------

• The Study of Japanese Literature •

The “butterfly dream” of Akutagawa Ryunosuke —Review of Akutagawa's China Trip in the Perspective of Multilateral Culture	ZHOU Yue (145)
Choice and Stuggle in Survival Predicament; an Interpretation of Teru Miyamoto's Haru no yume	GE Qiang (151)

• Introduction of Famous PHD Supervisors •

Professor CAO Dafeng	(157)
Professor ZHOU Yue	(158)

ソーシャルネットワークキング アプローチのすすめ

カリフォルニア大学サンディエゴ校 當作靖彦

Introduction to Social Networking Approach to Teaching Foreign Languages

要 旨 21世紀のグローバル化が進む中、20世紀には予想できなかった新しい問題が現在山積し、また今予想できない問題が我々を待ち構えている。このような世界で外国語教育はどのような役割を果たせるのだろうか。ソーシャルネットワークキングアプローチ(SNA)は外国語を使い、「問題解決能力」「社会貢献能力」を持つ学習者を作る新しい言語教育のアプローチである。小論では、このアプローチが出来てきた背景、理念、目標を議論するとともに、クラスでのその実践例を示す。

キーワード 言語教育アプローチ; ソーシャルネットワークキングアプローチ; 21世紀のスキル; つながる; グローバル社会

Abstract: With the fast-changing, globalized society of the 21st century, we have been faced with a large number of complicated issues we never encountered thus far. What role should language teaching play in the current globalized world? The Social Networking Approach, proposed by the current author, is a new approach in which language learners acquired knowledge, abilities, and skills necessary for them to become productive global citizens, solve those complicated issues, and contribute to the development of the sustainable world. This paper will discuss the philosophical and pedagogical foundation and background of this new approach to language teaching as well as how it can be implemented in the language classroom.

Keywords: language teaching approach; Social Networking Approach; 21st-century skills; connection; global world

1. はじめに

教育の最終目標は人間形成である。具体的には、その時代を生き抜く力を持った人間を育てることである。従って、教育の内容、アプローチはその時代を反映したものであ

ることが望ましい。言語教育のアプローチも例外ではない。言語教育アプローチは、時の教育理論、教育心理理論などにも影響されるが、その時代の社会が要求することによっても変化する。例えば、オーディオリンガルアプローチは、規則を知り、それを忠実に適用し、正しい文を作る人間が要求された産業化が急激に進行した時代を反映していたと言える。産業化時代の後、情報化時代を迎え、正しい情報を獲得し、正しい情報伝達が要求された時代に、コミュニケーションアプローチが生まれ、これまでの言語教育アプローチの主流となってきた。

21世紀に入り、いわゆるグローバル化が進行し、テクノロジー、インターネット主導の急速な変化が続く時代となり、これまでつながらなかった人、モノ、情報と簡単に、さらに瞬時につながるようになり、「つながる」がキーワードと言われるネットワーク社会となってきている。情報が次から次へと作り上げられ、発信され、20世紀とは異なり、情報のコントロールが難しい時代となり、当然のことコミュニケーション・アプローチでは今の時代を外国語を使って効果的に生きる人間を作るのは難しくなっている。

小論では、ネットワーク時代に対応した新しい言語教育のアプローチ「ソーシャルネットワーキングアプローチ(以下 SNA)」を紹介し、SNAを使った日本語の授業はどのようなものか、授業例を示す。

2. ソーシャルネットワーキングアプローチ(SNA)とは

2.1 背景

国際文化フォーラムは日本の高校レベルの中国語、韓国語教育の学習の指針となる「学習のめやす」の開発を2006年から続け、2012年に「学習のめやす—高等学校の中国語、韓国語教育からの提言」として発表した。この中に示された外国語学習アプローチをさらに発展拡大し、「学習のめやす」の監修者の一人である筆者が「Nippon 3.0の処方箋」(當作 2013)で、SNAとして提案した。

「学習のめやす」はもともと日本の高等学校と大学レベルの中国語・韓国語教育を念頭に置き、中国語・韓国語教師を中心に開発された学習標準ではあるが、ここに示された言語教育の考えは、ほかの言語の教育にも当てはまるものである。実際、日本では、「学習のめやす」をもとに、スペイン語教育のめやすが作られたし、現在、ロシア語、フランス語、ドイツ語のめやすも開発されつつある。SNAは日米の日本語教育でも広く使われるようになってきた。また、SNAの考えは外国語としての言語教育のみならず、第二言語としての言語教育、母語としての言語教育、継承言語教育にも使えるものであるし、高校、大学に限らず、幼稚園から成人一般教育まで幅広く応用できるものである。SNAの枠組みは人間形成を大目標として教育を行うという考えのもとに作られたものであるから、後述のように、その基本的枠組みは外国語にとどまらず、21世紀のネットワーク社会で生きることができる人間を育てようというどの教科にも当てはめることができるものである。

2.2 教育理念、教育目標、学習目標

SNAは以下の教育理念、教育目標、学習目標のもとに作られている。

●教育理念

他者の発見、自己の発見、つながりの実現。

●教育目標

ことばと文化の学びを通して、学習者の人間的成長を促進し、21世紀に生きる力を育む。

●学習目標

総合的コミュニケーション能力の獲得

キーコンセプト＝3つの能力(わかる・できる・つながる) × 3つの領域(言語・文化・グローバル社会) + 3つの連携 (学習者の関心、意欲、態度・他教科、既習知識・教室外の人、モノ、情報)

外国語を学習するということは、自分の言語とは違う言語を話す、自分の文化とは異なる文化背景を持った人間を知ることにつながる。人間にとって自分を客観的に眺め、自分のことを知るのは非常に難しいことである。外国語を学習することにより、他人を知り、その他人と比べることにより自分のことがより客観的に、またより明確にわかることが可能となる。そして、他人がわかり、自分がわかると、それを結びつけて、つながりを作れるようになるというのがSNAの言語教育の理念である。

外国語教育も究極的に「人間形成」がその中心にある教育目標であることを示したことは画期的と言える。これまで言語教育というと文法・語彙表現がすぐに頭に浮かび、それがさらに人間形成につながるという理念にはなかなか行き着かなかったと言ってよい。言語教師は言語教師である前に、人間を育てる教育者であるべきであるという理念を明確に示している哲学的意義も大きい。この教育目標が学習目標設定、カリキュラム作成、LESSONプラン作成、評価の枠組みを決定していくことは、これからの言語教育の方向性、内容を定める上できわめて重要なことである。

SNAの学習目標は総合的コミュニケーション能力の育成である。SNAでは、これまでの「わかる」「できる」に加えて、「つながる」という能力が言語教育の目標として加わったほか、従来の言語教育で扱われてきた「言語」「文化」の領域に加えて、「グローバル社会」領域も言語教育の目標領域として加えられ、21世紀のネット社会を生き抜くために必要な知識、能力、資質を身に付けることが言語教育の主要な目標の1つとなっている。

2.3 総合的コミュニケーション能力 3×3+3

SNAでは、外国語のクラスで身に付けるべき総合的コミュニケーション能力として3能力、3領域、3連携を挙げている。それを次に示す。

表1 SNAの総合的コミュニケーション能力

	わかる	できる	つながる
言語	A. 自他の言語がわかる a. 学習対象言語の文字・音声・語彙・表現(文法・語法)について知り、そのしくみを理解する b. 学習対象言語について新たな発見をしたり、母語と比較してその違いに気づいたりする	B. 学習対象言語を運用できる a. 学習対象言語を使って、身近な事柄や関心のある事柄について、自分の気持ちや考えを伝えたり、相手の気持ちを考え、情報を理解したり、相手とやりとりをして運用することができる b. 学習対象言語と母語を比較して、その共通性や相違性、関係性を探究して分析することができる c. 言語能力のギャップを埋めて、コミュニケーションを成立させるために、さまざまな言語および非言語ストラテジーを使うことができる	C. 学習対象言語を使って他者につながる a. 学習対象言語や母語を使って、積極的かつ主体的に他者と対話して、相互作用しながら共に関係を作りあげていく
文化	D. 自他の文化がわかる a. 学習対象文化に関して表象する様々な文化事象(事物や行動)について知り、理解する b. 学習対象の文化事象を観察して新たな発見をしたり、自文化や自分が知っている文化と比較して、その違いや関係性に気づいたり、推測したりする	E. 多様な文化を運用できる a. 学習対象文化と自文化をはじめ、多様な文化事象を比較して、知識・情報を活用しながら、共通性や相違性を分析することができる b. 文化事象間の異同の事由および文化事象の背景にある考え方や価値などを探求し、自分の考えを表明することができる c. 文化事象の分析を通して、文化の多様性や可変性といった文化にみる視点を身につけ、自文化を再認識したり、ほかの文化事象に適用したりすることができる d. 自他の文化をはじめ、異文化間の相違性から生じる誤解や摩擦、緊張関係を調整したり、妥協点を探ったりして、協力して問題を解決することができる	F. 多様な文化背景をもつ人とつながる a. 多様な文化的背景をもつ人びとと主体的かつ積極的に関わり、相互に作用しながら、軋轢や摩擦を乗り越えてつきあう

(续表)

	わかる	できる	つながる
グローバル社会	G. グローバル社会の特徴や課題がわかる a. グローバル社会(自分・学校。身近な地域社会・日本社会、広域地域社会・世界が密接につながる21世紀の多言語多文化社会)の一員としての自覚をもち、グローバル社会の特徴や直面する課題について理解する b. グローバル社会に生きるために、21世紀型スキルを身につけることが必要であることを理解する	H. 21世紀型スキルを運用できる a. さまざまな文化的背景をもつグループの一員として、メンバーと意見を交換したり、グループ全体の目標を達成するために、自分の役割を責任をもって果たすことができる(協働) b. 問題を解決するために、資料、状況を客観的に解釈・分析・吟味して判断し、自らの考えを根拠に基づいて表明することができる(高度思考) c. 情報を収集・編集・発信する際に、情報・メディア・テクノロジー(ICT)の特性をいかして、相互作用的に活用することができる(情報活用) d. 問題を解決するために創造力、想像力、柔軟性を使う	I. グローバル社会とつながる a. 人・モノ・情報にアクセスして、自分とつながりのあるグローバル社会のネットワークに関わり、ネットワーク全体の目標達成やグローバル社会づくりのために、自分の能力、知識、時間などを提供したり、メンバーと助けあい協力して行動する

+

関心・意欲・態度/学習スタイルとつながる
既習内容・経験/他教科の内容とつながる
教室の外の人・モノ・情報とつながる

(国際文化フォーラム 2012 p. 22)

これまでの言語教育のアプローチでも、「わかる」「できる」「言語領域」「文化領域」は学習目標の対象となっていた。SNAでは、新しく「つながる」と「グローバル社会領域」が目標として加えられている。

「つながる」は前節でも述べたように、21世紀のキーワードと言われるように、テクノロジーの発達により今までつながらなかった人、モノ、情報と簡単に、即時につながるようになり、それにより言語の諸相も目的も異なり、言語を使うことにより関係を構築し、社会を作ったり、社会を変えたりすることが重要となってきた。それを反映し、SNAでは、「わかる」「できる」に加えて「つながる」を言語学習の目標に加えた。ここで注意したいのは、「つながる」が「わかる」、「できる」の上位に来ているわけではないことである。この3者はそれぞれ同等に重要であり、言語学習を通してこの3つの能力が形成されていかなければ、バランスのある言語学習とは言えないということである。また、能力は「わかる」「できる」「つながる」の順序で形成されていくわけではないし、またその順序で教えるべきものでもない。学習環境、学習内容により、「わかる」「できる」よりも先

に「つながる」活動が行われてもいいのである。「つながる」は言ってみれば、言語を使い社会活動を行うことであるが、このような自ら言語を使って社会活動をする学習環境のほうが学習がより進む場合もあるのである。

また、「つながる」はSNAではいろいろな意味を持っている。「+3」の連携も学習と「つながる」ことである。学習者個人の意欲、態度、学習スタイルとつながることにより、より動機付けの高い言語学習が進む。また、これまでの言語学習は文法・語彙という表現のツールは教えても、それを使って自己発信したりするための内容を与えていなかったことが多かった。SNAでは、言語学習の中に、学習者が他の教科で学習した内容や既習内容、知識とつなげて、学習を行うことを学習目標の1つとしている。また、言語のクラスの内容がクラス外の人、モノ、情報とつながることにより、言語学習がより現実社会を反映したものとなり、学習の動機付けを高めるだけでなく、現実社会で使える知識・能力を身に付けることになる。

SNAにおける「つながる」は単に、自分の外のものとして「つながる」だけでなく、自己を内省し、自分自身と「つながる」ことも意味する。これはSNAの教育理念の自己の発見ともつながることである。

さらに、知識、能力を形成するということは、頭の中で知識のネットワークが作られ、そのつながりが強くなることである。このネットワークを強くする方法はいろいろあるが、学習においては社会活動、協働作業を通して行うことがその1つである。多様な「つながる」活動を行うことで、知識のネットワークの「つながり」を強めるのもSNAの目標とするところである。

テクノロジーの急速な発達、それによる経済競争の激化、社会構造の変化など私たちは人類の歴史に残る大きな変化を現在経験している。このため21世紀の世界は20世紀の世界と比べて、より複雑で、生きるのが難しくなっている。今の時代を生きることができる人間を作ること大目標とする教育の世界では、21世紀を生きるための知識、能力、資質を身に付けることが、各教科の内容、その応用力を身に付けること以上に重要なこととなってきている。この方向性を反映して、SNAでは、言語領域、文化領域と並んで、「グローバル社会領域」が言語教育の目標として加えられている。

「グローバル社会領域」の「わかる」は現在自分たちが置かれている社会の状況、また将来対峙しなければならない問題点を理解することが目標となっている。この領域の「できる」は、21世紀を生き延びるために必要な知識、能力、資質としてOECDのキーコンピテンシー(Rychen and Salganik 2003)やアメリカの21世紀のスキルパートナーシップ(Trelling and Fadel 2012)が挙げている21世紀のスキルを身に付けることを目標としている。「学習のめやす」ではこれからのスキルの中で、「協働力」「高度の思考能力」「テクノロジー、情報、メディアのリテラシー」の3つのみを特に取り上げていたが、SNAでは「問題解決能力」「創造力」「想像力」「柔軟性」「忍耐力」など21世紀のスキル全般を獲得することを目標としている(21世紀のスキルのうち、「コミュニケーション能力」は「言語領域」に含まれているし、「異文化対応能力」は「文化領域」に含まれている)。

SNAは「グローバル領域」の「つながる」能力獲得が言語学習の究極的目標と考え、この能力を得ることを目標として言語教育は行われるべきだと考える。すなわち、言語を使

い、「社会の問題を解決し、社会に貢献する」「社会を変える」「新しい社会を作る」ことができる人間を作ることが言語教育の最大の目的であり、そのために「3×3+3」の総合的コミュニケーションを身に付けるよう教育を行うわけである。この意味で、SNAは「問題解決のための言語教育」であり、「社会貢献のための言語教育」と言うことができる。

3. ソーシャルネットワーキングアプローチの実践

SNAでは具体的な授業活動ですべき実践の方法は示していない。各教師が自分の与えられた環境で、「3×3+3」の12の目標を調和を持って達成するための最適の内容と方法を使い、問題解決をし、社会に貢献できる人間を作ることを目指している。

最近の言語教育の発達により、より学習者中心で、それぞれの学習者のニーズを考慮し、また、クラス活動と現実社会を結びつけ、学習の動機付けを高める教育アプローチが提案され、実施されている。これらの活動自体が、SNAの総合的コミュニケーション能力発展の目標を達成しようというものであると言ってよい。それぞれの教師が自分の教育環境、学習者のニーズを考え、最適の学習環境を作る努力をすることが望まれるし、そのために、教師が自己の能力開発を続けることが大切である。

SNAの実践の例の1つとして、プロジェクト型学習(Kemaloglu 2010)を使った授業活動をここに示す。

言語教育におけるプロジェクト型学習とは、学習者が現実世界の問題を見つけ、それを解決しようという過程で、言語能力をはじめ、様々な知識、能力を発展させていく学習方法である。学習者は地域、国家レベル、あるいは世界レベルの問題を見つけ、それについてグループで調査、研究、作業し、解決策を探し、それをマルチメディアを使い提示していく。厳密には、クラスの一部としてプロジェクトを行うプロジェクトを使う方法や単にプロジェクトの結果を最後に発表する方法とは異なり、プロジェクト自体を通して言語能力や21世紀のスキルを身に付けていくものである。単純化したものであるが、プロジェクト型学習は次のようなプロセスをへて行われる。



図1 プロジェクト型学習の典型的プロセス

次に示すプロジェクト型学習は日本の地方都市にある大学に留学する外国人学生たちが行ったものである。この大学がある町では過疎化が進み、若者が東京など大都市圏に出て、町の住民の多くは高齢の老人である。商店街はシャッター街となり、無人の家なども増えた21世紀の日本の地方を象徴するような町である。大学の隣の土地もしばらく

空き地となり、雑草が繁っていた。この土地の持ち主の老人が日本語を学習する外国人留学生に自由に使ってほしいと土地を提供してきた。留学生たちは、日本語の授業を通して、どのように土地を使うかを考え、実際に土地を活用することにした。また、この活動を通し、日本の少子高齢化を考え、これにどのように対応すべきかを考えることにした。

教師はまず土地の提供があったことを学生たちに伝え、自分たちで最も有効な土地利用を考え、実践するようという課題を与えた。同時に、この土地が空き地になった背景などを簡単に説明し、なぜこのような空き地が増えたかを考え、このような状況の中で、地方都市の人たちはどうすべきか解決案を提案するように求めた。これからの授業活動のスケジュールを示し、自ら計画を立て、土地の実際的な使用まで活動し、最後は自分たちの活動、提案を外部に発信し、それに対する反応、日本語能力の発達まで含めて、自分たちの活動を評価するように指示した。

学生たちは自分たちで土地の状況を調べたり、土地が空き地になった状況などを調査し、自分たちに何ができるか、土地をどのように有効利用すべきかブレインストーミングをした。ブレインストーミングと近所の人たちとのインタビューの結果、空き地に庭を作り、地域の人が集まって、交流できるスペースとすることに決めた。

次に、庭を造る計画を具体的に立て、グループを作って計画を実現していくことにした。日本の庭園や季節の花について調べるグループ、必要な資材などを調査するグループ、必要な資金を集めるグループ、計画の実現の状況を記録し、外部に発信するグループなどに分かれ、またグループからリーダーを選び、リーダーが定期的に会い、活動をコーディネートしていくことにした。これらの活動は全て日本語を使い、日本語の授業の一環として進行させていった。留学生があくまでも活動の中心となり、教師は必要な時にアドバイスを与えたり、必要なリソースがある場所を示したりする役割に徹した。

庭に植える花や木について調査するグループは大学の近所に花を育てるのが得意な老人がいることを知り、老人と会いアドバイスを受けることにした。結局この老人がこのプロジェクトを通して、いろいろ指導してくれることになり、庭造りのボランティアも近所で探してくれることになったし、資材などの多くを提供してくれた。資金を集めるグループは自分の母国の料理を作り、学園祭でバザールをして売って資金を作ったほか、募金集めの応募書を作り、大学の近所で募金集めを行った。このように近所の人と交流をしながら、クラスの時間、放課後、週末などグループで庭造りを進め、記録系のグループは写真やビデオを撮影し、それをFacebookで発信した。また、地域の人たちとの交流を通して、日本における過疎化、少子高齢化などについて調査し、その解決策などを話し合う時間も設けた。

庭が完成した後、近所の人や大学の日本人同級生を招き、開園式を行った。開園式の式次第も学生が計画した。開園式では記録系のグループが作ったビデオが披露され、これまでの過程を振り返った。また、学生の代表、教師、近所の町会長が挨拶をした。

その後、これまでの自らの活動を反省し、評価の議論を行った。この活動を通してわかった日本の過疎化、少子高齢化の問題について自らの提言をまとめてFacebookで発表することにしたほか、作った庭園の維持などを後輩の留学生に託すとともに、近所の老人たちにもそれに関わってもらうことにした。最後に教師から渡された評価用紙をもと